

編集室から

のっけから私事で恐縮です。

今年の皐月は中旬に娘の結婚式が控えているので、例年よりも予定を前と押ししてGW中の田植えとなりました。田植えは、当日だけが忙しいのではなく、前腹取り・田起こし・代掻きと一定の間隔を置いた準備があり、さらにその間に畦の草刈と近年増えた獣害に備えるための電柵の整備など、盛りだくさんです。

毎年、代替わりをされると言われつつも、老丈母にほとんど頼っていたのですが、いよいよ今年はそう言う訳にも行かず、先月の後半から全週末は、これらの準備をしていました。とはいえ、実際に耕運機を扱うのは所有する叔父で僕は、その手元やら周辺の段取りやらのみの軽作業。

後輪がパンクして一時は廃車かと思った亡父のバイクを友人が一宿一飯で修理をしてくれたお蔭で、山田と自宅の往復も楽チンでした。

いよいよ田植え当日。天候は小雨。事前に依頼しておいた田植え機を持っている親戚が早々に運んできてくれたのですが、水管理の不届きも重なって、しばし天候の様子を伺いながら時間待ち。今年こそは、自分で田植え機を扱うつもりが、「こいつにやらせると何時間かかるか判らん」と、例年通り叔父が田植えを始めてしまい、僕は畦で風に吹かれて、苗の補給のために控えているばかり...(^^;ゞ。

丁度すべて終わった頃に、娘が長靴を履いた婿殿を伴って帰宅。「機械が植えられない四隅と、植え損ないを補う『追苗』は天気を見ながらやるから」と言うも、その気でやってきたからと、婿殿も娘を伴って田植えに参加。それをみた丈母と家内も(やらないと言っていたくせに)田んぼに入りだしました。

肝心の僕は、何故か猛烈にくたびれて、後は任せて有難くシエスタした次第。深謝。(は)



のと
だらぼち

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川畠さんが「能登だらぼち」を引き受けて改装開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

のと だらぼち
03-5537-3078
17:00～23:00 日曜祝休

中央区銀座8-4-27
プラザ銀座ビル地下1階
(銀座外堀通りasics前)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2018/05
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp

2018/05
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

皐 月



薬師の里から望む立山連峰
七尾市にて
by hama

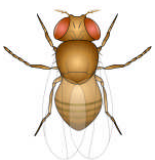
食物繊維が我々の体の中で何をしているのかを解明するためには、腸内細菌の理解が欠かせません。しかし前回述べたように、今はまだ「界・門・綱・目・科・属・種」のレベルの解析しかできていません。まだまだ、時間がかかりそうです。そう考えると、現在まことしやかに言われている「腸内細菌を良くする...」も怪しいものです。せめて今の時点で何が正しいのか、根拠と共に考えてみます。

腸に細菌を供給することを「プロバイオティクス」、腸の環境を改善することを「プレバイオティクス」と言います。「プロ」と「プレ」で紛らわしいですから、気をつけて下さい。マスキミ受けるのは、「プロ」のほうです。飲料やチョコの中に、億個の菌、という宣伝です。普通に食べると唾液から胃液に入るだけで菌数は千万分の一になるのですが、コシを信じて仮に百億個が胃を通りぬけたとしましょう。それでも、腸の中には既に百兆個の細菌が棲んでいます。ちょうど人口十万人の都市に、十人の外国人が移住してきたようなものです。一年間きっちり毎日欠かさず食べ続けたとしても、四千人の集落です。ところが細菌は、環境さえ合えば十〜三十分程度で分裂する事ができます。仮に一個しか腸にたどり着かなかったとしても、環境に恵まれて三十分おきに分裂していくと一時間後に二の二乗で四個、二時間後に二の四乗で十六個、三時間後は二の六乗半日あれば二の二十四乗で千万個を超え、一日経つと二の四十八乗で二百八十兆個を超える計算になります。現実にごここまで増殖することは有りませんが、たった一個の菌でも条件さえ良ければ僅か一日でここまで増える可能性があるわけです。ネズミ算おそるべし、です。そして腸の環境を変えて体に良い菌が

増えやすくする、「プレ」の威力も納得していただけたかと思えます。

では、どうすれば体に良い菌が増えるのでしょうか。体に良い菌は善玉菌とも呼ばれ、乳酸菌がその代表です。乳酸菌とは糖質を分解してエネルギーを得て、食ベカスとして乳酸を周りに出す菌の総称です。ビフィズス菌も、その仲間です。乳酸菌は、酸素があっても生きていける菌からビフィズス菌のように酸素があると生きられない嫌気性菌まで多種多様なのですが、菌数では腸内細菌全体の二十〜三十%程度なのだそうです。それに対して腐敗臭の原因になることで悪玉菌と呼ばれるものは、どんな人にも十%程度いるそうです。そして残りの七十%は、日和見菌と呼ぶ研究者もいるような、何をしているのかよく判っていない菌たちです。

かつて私たちのDNAも、遺伝子として働くのは僅か二%で、残りの九十八%は何をしているのか判らない不要かもしれない領域としてジャンク(ゴミ・ガラクタ)と言われていました。しかし研究が進むと、意外なことが判ってきました。遺伝子の数が、ヒト(約二万二千)とショウジョウバエ(約一万四千)で大差なかったのです。遺伝子は、体を作るための道具のようなものです。道具の数はほぼ同じで、違ったのは使い方でした。そして九十八%のジャンクが、遺伝子という道具を「如何に」使うか調節してヒトとショウジョウバエの違いを生み出していたのです。その詳細なメカニズムは、いまだに完全には解明されていません。同じように、今はよく判らない日和見菌ですが、いずれその重要性を理解できる日が来ることでしょう。



【プロフィール】
いがき としお(金沢大学北潟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とつても怖かった。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松でヌクヌクしています。)

濱のつばやき 『祭礼の行方』

今年も青柏祭(せいはいくさい)の季節となった。昭和五十八年日に国の重要無形民俗文化財に指定され、一昨年十八府県三十三件の「山・鉦・屋台行事」と共に、ユネスコの無形文化遺産に登録されたこの祭礼は、今から三十八年前にから始まっている。伝統祭礼には珍しく誰でも曳き事ができる「でか山」と呼ばれる曳山の登場からも約五百年を経ている。

一方で開催日程は、わが国の伝統祭礼に良くみられるように五月十三〜十五日とされていた。GWに住民は、外に遊びに出てお金を使うが、青柏祭の日は平日となることのほうが多く、誰でも参加できる割に曳き手が集まらず、担い手も休暇を取る負担を強いられていた。

この状況に対して、地元では賛否両論を経てリーダーの勇断によって現在の五月三〜五日へと開催日程を十日繰り上げたのが、平成二年。この年以降、年々参加者が増え、運行の担い手も男性ばかりではなく、レディーと呼ばれる女性陣も組織されて益々盛り上がるようになっていく。

北陸新幹線の開業はもとより、能越自動車道などの開通もあり、ここ数年は山の曳綱を持つことさえままならないほどの人気ぶりで、和倉温泉を始めとする市内の宿泊施設は予約が難しいと聞く。

議論百出の当時、変革組みの一部の方の自宅に脅迫電話まで掛かっていたというから、「神事は触るな」という信仰心からの畏れの深さを感じたものだが、果たして犯罪にもつながる電話の主は祭の隆盛と国際的な認証を受けるまでになった今日をどう見ているだろうか。

神事は、人々の心の拠り所でもある。あたや疎かにしてなるものではない。が、かといって環境が大きく変わった今日、何も変えずに衰退するのを眺めるかのよいうな姿勢は、その伝統をつなぐという意味で逆向きの発想なのではないか、と思う。

地域の心意気に触れていただき、また祭礼に必要なさまざまなコトを、経済循環も含めて伝えつないでいく工夫と努力こそ、真の意味で神事を盛り上げることになりはしまいか。

二ノ宮尊徳の教えにあるように、経済と道德の両立・バランスこそ、地域の発展の礎なのだと思う。

豪雪の記憶が残るなか、当たり前のように春が駆け足で通り過ぎつつある。我が家でも4月半ば頃からタケノコが出てきた。4月末で累計200本余りの収穫である。よく採れる年を表年と言い、1年交替で表、裏を繰り返すのだが、表年のはずの今年、いまだその勢いは見られていない。

竹冠に旬と書いて筍。一旬とは十日間のことであり、タケノコは約十日間で竹に成長することを表しているとも言われる¹。まさに旬の食材。大いに楽しみたいものである。

タケノコ栽培に適した竹密度は1,000㎡あたり250本と言われている²。本数管理を行い、親竹に十分な太陽光を届かせることにより、よいタケノコが生えてくるのだ。我が家の竹やぶは約750㎡。180~190本が適正値と思われるが、ざっとその3倍は生えている。昨秋にかなりの古竹を整理したのだが、まだまだ適正値には程遠い。

また、よいタケノコを発生させることのできる親竹は5年生までとも言われている。すなわち、6年生以上の竹を毎年伐採するとともに、生えてきたタケノコの中から有望な親竹を残すことにより、5年生までの親竹で適正な本数となるよう計画的に竹やぶを管理することが求められている。

タケノコは地上に頭を出してから約1ヶ月で親と同じような高さの竹になる。3年前から、タケノコとして収穫せず親竹にしたものに西暦の下二桁を記している。目の高さのところにある節に、直接黒マジックで「15」、「16」、「17」と。5年生までで180~190本にするには、毎年36~38本のタケノコを残せばよいという計算になるが、つつい掘りすぎてしまい、そんなには育てられていない。

要は、古竹の思い切った整理こそが、最重要課題であり、その後、数年かけて、よいタケノコを発生させるための適正かつ安定的な状態を作り出すことが求められている。今は、タケノコの収穫とともに親竹にすべきタケノコの見極めを行っているが、その時期が終わったあと梅雨までに相当数を間引くことを予定しておきたい。

最後になったが、我が家はタケノコ農家ではないことを申し添えておく。

注1：諸説あり、語源とまでは言えないようだ。

注2：山形県森林研究研修センター「孟宗竹栽培管理マニュアル(山形県版)」平成29年

某ジャニーズアイドルグループに所属する46歳の男性が、高校生への強制わいせつ行為で書類送検されテレビをにぎわしております。

「46歳のいい大人なのに」とか「自分の子供のような年の女の子に」とか非難轟々の扱われ方ではありますが、つまるところ、彼はたまたま46年生きてきただけで、決して大人ではなかったのだと思います。特に、あのようなアイドル事務所に所属していると、年端もいかない子供のころからレッスンだけに明け暮れ、10代半ば過ぎには、女性たちから黄色い声援を受け(やっかみ半分ですが)何か不都合なことは強大な力をもつ事務所が処理してくれると、周りも忖度してくれる。という環境の中でいわば“おっさん”と言われる年代まで守ってもらってきた人間が、真の成熟した大人になりえるとは思えません。もちろんその全ての人間がという訳ではありませんが。三十路を超えたいい大人が若々しいことを前面に押し出し、少年っぽい言葉選びや言葉遣いがカッコいいとも言われてしまう。まるで、老いていくことが罪のように感じてしまうのが今の大人なのではないでしょうか。

今回のこのような事件をきっかけに思うことが、『大人の流儀とは』です。伊集院先生の名著のひとつでもあります。今日日本人が考えなければならぬのは正にこの言葉かと。極端な言い方をすれば、以前は異質なものとされてきた、趣味嗜好が市民権を得て、変な話なんでも許される時代になったという感じがします。それはつまり、『大人なんだから』という言葉が全く意味をなさない時代とも言い切れます。例えば、10代のアイドルを応援するおじさん世代は昭和の時代では、恥ずかしいことでした。それ自体が悪いわけではないですが、その10代の女性アイドルとの疑似恋愛化や様々なメディアでのいかがわしい情報の氾濫が、未成年女性への性的関心を高める要因になってしまっているのは否めません。

おおらかな時代ともいえるのですが、そのおおらかさを享受するからこそ、大人としての流儀というものも求められてくるのだと考えます。

江戸時代以前においては、15歳で男女ともに大人と見なされ婚姻関係を結び、子を産むのは当たり前でした。それはつまり、早い年代に自立をし、己の生命も含めてそこに責任を持つという流儀がありました。

来年から新たな元号となります。未来の日本の歴史において、平成や次の時代がどのように語られていくのか、その責任を個々人がきちんと考え行動する事、それが私なりの大人の流儀であると考えています。

『富士の国から ~大魔神のたび~』マレーシアへの旅 2018.3.23~3.26
静岡県小山町まちづくり専門監 溝口 久

日経新聞一面広告の「マレーシア航空A380往復ビジネスクラス利用、ヒルトンに泊まるマレーシア4日間 14.99万円」が目飛び込んできた。や、安い！

早速、長女に行かないかと誘うと小生がスポンサーを条件にOKとのこと。3月23日10:20発に乗り込むのだが、JALの桜ラウンジで旅のスタートを楽しむために8時前には成田空港に着くようにした。

ラウンジには日本酒、ワイン、ビール、ウイスキー、各種料理が取り揃えられている。ただ、ここであまり食べてしまうと機内食が口に入らなくなる。

阪急トラピクスのツアー、家族で行くときにツアーの利用は無くエア&ホテルのみなので旅前から現地発のツアーの申し込みや着いてからの交通手段を考えなくてはいけないけど、今回は楽だ。安さのことがあってか、催行人数枠いっぱい20人の団体旅行となった。80を超える女性一人での参加があったことに驚いた。父娘組はもう一組いた。他は年配ご夫妻、おばさまペアだ。おじさん一人はいたがペアはいない。おじさんペアでの旅は国内では結構しているのだが、海外ではない。気楽でいいのだが、外聞が悪いか実行はまだである。

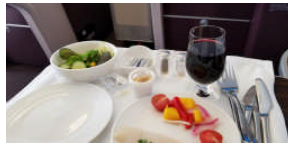
A380という機体世界初の総2階建てジェット旅客機である。初飛行は2005年。ビジネスクラスは2階にあるので、ボーディングブリッジは二手に分かれ2階へ直接アプローチする。

座席はフルフラットになるシートだ。かつて乗ったカタル、ターキッシュエアラインに比べると少々くたびれ感があった。

でも、食事のメニューは事前予約ができ、その料理が出てきたはずだ。メニュー名だけで選んでいて実物を想像できていなかった。味は行も帰りも、まあまあよろしいものだった。

17時にクアラルンプールに着いた。

マレーシアは、人口の6割をマレー系、3割を華人系、1割をインド系が居住する多民族国家だ。対日的には「ルックイースト政策」を掲げたマハティール政権、それを継承したアブドラ政権の下で緊密な関係が維持され、日本企業のマレーシアへの進出は盛んだ。



空港から中心市街地までは、車で一時間ほど。ホテルに入る前にマレー料理の夕食、団体ツアーを主としたレストランなので、味はともかく、あまり入りたいたとは思わない店だ。ビジネスクラス・ヒルトンの旅では勘弁してほしいと言わざるを得ない。この手の旅の夕食は無しの方がいい、地球の歩き方でも持って、評判の高いレストランを選んで行ってみる。それがいい。

イスラム教徒の国だから豚肉は使っていないということ、禁酒であるから、レストランで酒は高め、ドバイと違って酒はあるにはある。ビール大瓶1,000円ほどだ。その後、どこの店にでも同じ価格。多分、日本人ツアー共通の割高価格が設定してあり、そのバックが添乗員に入る仕掛けかなあ。

食後はホテルへ。ヒルトンだけど、驚くほどのレベルではない。駅がそばにあり、その先にはショッピングモールがあった。国外の商品は日本での価格と差はない。スーパーにある食品は安く、南国らしく果物は豊富だ。

ホテルの朝食は中華、インド、英国、日本食何でもござれだ。個人旅の時は、ホテルのバイキングの朝食をたらふく食べ、昼食を抜くことにしている。

二日目は世界遺産マラッカへ。2時間半ほどかかる。

マラッカはマラッカ海峡の重要な東西貿易の交易点として500年以上に渡り繁栄を繰り返した。建物、教会や広場は15世紀に興ったマラッカ王国と16世紀初頭のポルトガル、オランダの支配の歴史を大きく反映している。

マラッカは東アジア、東南アジアにおいて類をみないユニークな建築様式、そして文化的な町並みを構成していることが高く評価され、2008年7月に世界文化遺産に登録された。特に朱色のオランダ広場が印象的だ。

「トライショー」と呼ばれる三輪車タクシー。商標権なんのそのとピカチューやらキティーちゃんが色鮮やかな花や電飾と共に施されており、中には大音量の音楽を流している者もある。

街中散策を後は、マラッカ海峡そのものを見に行った。海峡モスクは海と空のブルーに映えて美しい。見入っていると、そこに水陸両用のバスが海に入り、間もなく止まってしまった。エンジンがかかる様子もなく、結末を確認する間もなく、我がツアーは食事会場に向かった。道中に別のダックツアーのバスが空で走っていくのが見えた。どうやって救うのか？そのことが気になっていた。

食事が済むと、ツアーに付き物の“メンゼイテン”だ。今回は雑貨、貴金属、チョコレートそんな処を連れまわされた。殆ど見る気もないのだけど、その割にはアトピーに効くなまこ石鹸、カカオ成分がやたらと多いチョコレートなんか買ったりして。(つづく)

